

出発進行♪

寅さんは妹と食事をしている時に叫んだ！

「さくら、ギツチョコか!？」

(桜木町)

35歳の誕生日を迎えたタカシは、ホモセクシャルなボ
ディビルダーだった。

彼の〃彼女〃は、その裸体を見て惚れぼれと眩く。

「タカシ……マツチョコだわ……」

(高島町)

その日、洋子はまったりとしていた。

(横浜)

櫻まる子は魂胆があるのか、親友に猫なで声で擦り寄
った。

「ねえ、たんまちやあぁ〜〜ん」

(反町 14・03・15)

「夕べは呑み過ぎたか……」

濱課長は、珍しく寝坊してしまった。朝食を口にしつ
つ、朝刊の見出しだけを忙しく目で追う。

「あつ、志賀先生！」

彼は死亡記事欄を見て絶句した。彼が若いころ、ひど
く世話になった師の訃報が載っていたからである。

「昨年奥さんを亡くしてから、急に元気をなくしていた
けれど……オシドリ夫婦だっただけに、辛かったんだろ

うなあ……」

新聞にも妻との関係にさらりと触れていた。

『志賀氏は苦楽を共にした夫人を失ってからは――』

(東白楽)

◆
酩酊状態の洋子は、帰りの東横線にどうにか乗り込んだ。先ほどまで一緒だった濱課長の、脂ぎった顔が浮かぶ。酔いに任せて云いよる課長の甲高い声が耳朶に蘇る。鼻腔には腐りきった柿の臭いが。

緊張から解放された彼女は、身体に残る課長の気配と、混雑した車内の揺れと効き過ぎる暖房に気分が悪くなってきた。とりあえず到着した駅で降りるしかない……。

電車が止まり、洋子は客を押しつけて外に出ると、ベンチにへたり込んだ。
顔が蒼い。

「気持ち悪いよう。ここは何処なんだろう……」

囁きを聞き、なぜかチャイナ服を着た老人が近づいてきた。

「吐く、ラクあるよ」

(白楽)

◆
小学三年生の利夫くんは、名古屋から転校してきて半年がたちます。でも利夫くんは、なかなか友だちができません。

それは利夫くんの、何でも自分が一番と云う自慢くせが鼻につくからです。

その利夫くんは、もうすぐ誕生日を迎えます。そこで利夫くんは、友だちを増やすために、お誕生会を開いておうちに同級生をしようたいしました。

初めてやってきた利夫くんの同級生たちは、おうちが

あまりに大きいので驚いています。

「うっそ〜〜〜」

「利夫ちゃんちって、ほんとにこの家なの？」

「何つぼあるんだろうね……」

「信じらんない」

利夫くんは、おうちに驚く同級生たちに『してやった
り』と自信を持ちました。

「うんみゃ〜、オレンちだぎゃ〜」

(妙蓮寺 14・03・15)

◆
昼から呑る酒は、効くなあ〜〜〜

(菊名)

◆
昭和40年代、新三種の神器を持つことが庶民のステイ
タスとされていた。

その日、真夏の蒔呂家には、その一つがようやく届く
はずであった。……が、待てど暮らせどやってこない。
亭主は妻に当り散らす。

「暑いぞバカ野郎！ おう、クーラー屋、まだか!？」

(大倉山 14・03・17)

◆
男は改札を出ると、駅前広がる景観を眺めて呆然と
立ち尽くした。

「……ここは本当にオレの住んでいた街なのか？」

彼は振り返って駅名を確かめ直した。

「変わった……何もかも……ハア」

大きく溜め息をついたその男の名は、〃 綱島 太郎。

(綱島)

◆
聖なる東横線

♪日吉この夜

(日吉)

◆
綱島温泉の割烹「月亭」では、東横商事の歓迎会が始まるうとしていた。

だが盛り上げ役のコンパニオンは、開宴時間が近いと云うのに一人も来ていない。女将は宴席のしきたりを知らない彼女たちが正直、好きではなかった。

玄関で業をにやす女将。

そこへ今時の娘たちの叫声が響いた。

あっけにとられる年配の女のことなどお構いなく、たちまちにして大広間から、女に媚びる男たちの野卑た怒鳴りにもいた騒ぎが始まった。

立ち尽くす女将は腹立ちまぎれに愚痴る。

「履き物は……もつとすみいよしとかないと」

(元住吉)

◆
小次郎は独り、巖流島で男がやって来るのを待っていた。

ナルシシストの彼は闘いに臨むいつものつねで、唇に薄く紅を引き、脛にはシャドー、頬も淡く染めている。

……海上に男の乗る櫓漕ぎの舟が見えてきた。

男は腕にこそ自信があったが、小次郎と違って容姿はまったく垢抜けない。それは男のコンプレックスにもなっていた。

「待たせたなあ！ 小次郎!!」

「待ちかねたぞ！ む、む、む……」

男の負けじと化粧をした異様な容貌に、小次郎は声をあげた。

「武蔵……濃すぎ……」

(武蔵小杉)

◆
小田急線の「新百合ヶ丘」は「シンユリ」なんぞと略称で呼ばれている。

東横線の兄弟路線である新玉川線の「三軒茶屋」は「サンチャ」(↑イイ響きではありませんナ)「二子玉川」は「ニコタマ」ですつて。

であるならば、「新丸子」は「シンコ」だなんて……そんな呼ばれかたは……まさかしないでしょうね。

(新丸子 14・03・19)

◆
タラ「泣ウエ〜〜ン」
サザエ「タラちゃん! どうしたの?」
タラ「泣ウエ〜〜ン」
サザエ「泣いてちゃ分からないでしょ」
タラ「泣いなくなっただすう」
サザエ「いなくなっただって、誰が?」
タラ「泣タマが〜〜」

(多摩川)

◆
山佐家の慌しい朝が始まった。

母「おかずは納豆で我慢してね」

父「ん。おいしい、母さん!」

母「ちよっとキツコ、取ってやって〜!」

娘「取るって、何を〜?」

父「ああ、あつたあつた」

母「ちよっとお父さん、そっちは違っわよ」

娘「なあ〜んだ、そっか。お父さんのはこっち」

山佐家では、高血圧気味の父親の健康を気遣って、減塩醤油が使われていた。

娘「ちよつと、そのどこが駄洒落なんだよお〜！」

と、そんな風にカラまれても困るのである。

娘「つくから、一緒なのは母音だけじゃん！」



山で暮らす重蔵の生業は、猟師である。だが環境破壊の影響で、獲物は年々減ってきていた。

「今日もダメだったか。しかたねえ。里へ降りるか……」

うつむき、隣りを歩く猟犬のシロに話しかけた。

「今日も里で探すしかねえか……」

山小屋に戻った重蔵は、獲ってきたカラスを手早くさばいて金串に刺すと、囲炉裏の灰に突き立てた。

「……………」

彼は無言で火を見つめる。

「……………」

シロは無言で彼の顔を見つめる。

「……………」

外では、連れ去られた仲間を気遣ってやって来た里のカラスが一羽、小屋の様子を無言で見つめる。

“ジュツ、ジュジュツ”

炭に炙られたカラスから脂が滴り落ち、香ばしい匂いが立ち込め始める。重蔵は、そいつを見つめてヨダレをすすり始める。シロは嬉しそうに、狼よろしく遠吠えをあげ始める。外では、匂いを嗅ぎつけてカラスが鳴き始める。

それぞれの音が、山に静かに響いた。

“ジュルジュル”

“ガオ”

“カ”

◆ 独身の濱課長は、横浜で開かれている『男の料理教室』に参加していた。今日の課題は「棒棒鶏」である。

まず何と云つても、鶏肉の下ごしらえをしなければならぬ。濱は大声で、受講生に訊いた。

「鶏、いつだ、湯がくの?」

(都立大学 14・03・13)

原案：モコさん

脚色：ちつとも屋



お堅い洋子には、濱課長のエロギヤグが通じない。それは彼女が、屈指のお嬢さま系学校の出身だからか。

対する濱は、会話に何かしらのオチをつけないと気が済まない性格である。どこことなく品位に欠ける彼の出身が、カックン系大学だと云うのも頷ける話である。

(学芸大学 14・03・12)



濱課長は朝から機嫌が悪かった。

職場では関西訛りの彼の、聞き苦しい胴間声が響く。

「洋子はン」

彼女はコンパクトの鏡を覗いて、化粧くずれを直していた。

「洋子はンツ！ 例の企画案の返事は来たンかいな!?!」
彼女は聞いてはいない。

「洋子はンツ!! 耳あらヘンのかいな? ほんまに……」
濱が荒れているのは、洋子への誘いをあっさりと袖にされたからである。

「今報告書を書いています!」

「嘘云うンやないでえ！ 化粧、直しとったヤないか!!」

「ったく……」

呆れる洋子だった。

「ここをどこや思うとるんや！」

「はあ？」

「どこや思うとると云うてんじゃ!!」

(祐天寺)



神奈川にある「逗ッ子り寿司」は、ネタの大きさで有名だ。ここでは毎月一回、お客様感謝デーとして「60分ひと腹勝負・大食い大会」を開いている。

洋子と濱課長は大食いを競い合っており、この店の常連であった。

今年の両者の戦績は師走の今日まで五勝五敗一分と、この大会で雌雄を決することになっている。

洋子は開店早々にカウンター席に陣取り、濱課長を待ち受けていた。だが：課長はまだ席に着いていない。

そんな二人のプライベートな戦いのことなどお構いなく、大会開始の太鼓が叩かれた。

「フン！ どうやら私の不戦勝ね」

洋子は次々に寿司を頬張り始めた。

彼女は何度もこの大会に出た経験から、そのネタの順序を自分で決めていた。いつものように、淡白な白身から攻める。いきなり中トロから入っては、脂が喉にまわりついて量を食えないからだ。

そのころ濱課長は走っていた。

「まいったでえ！ クレーム処理で時間を取られ過ぎやがな」

大阪訛りを吐き捨てる彼の頭に、寿司をパクつく洋子の口が浮かぶ。

喘ぎながら時計を見た。

「彼女の戦術ではポチポチ貝に入るころやろか……」

一方、ライバルのいない洋子は悠々と食べられることに、大いに満足気であった。

「フツッ、今年は私がもらったわ」

その刹那。

「洋子！」

返ッ子り寿司の扉が大きな音を軋ませて開いた。

「何貫目食ろうたンや!!」

(中目黒)

◆ 「おお、これはこれは、今年はお初でンなあ」

「さいでんなあ、明けましておめでどう、今年もよろし

ゆう」

「こちらこそあんじょう頼ンまっせ」

「それにつけても今日はさぶいなあ」

「そやなあ、えろう冷えまんなあ」

「いったい、いつンなったら暖っこくなるンやろうなあ」

「ほんまやわなあ」

「おおい、番頭はん、今日は何日かいなッ」

「……はあ、二十日でございます」

「正月二十日か、そりやしゃあないなあ」

「そやそや」

「大寒や、まあ、しゃあない」

(代官山 14・03・14)

◆ トイレのドアが勢いよく閉まった。豪快な放屁が響く。

刹那、玄関のドアがノックされた。

妻は困惑した。

「まただわ……なんてしつこいンでしょ。昨日も、一昨

日も一昨昨日も……」

なおもノックは続く。

「奥さん、いらっしやるんですよ。話聞いてくださ
いよ〜」

妻はたまらず、トイレに居る亭主に声をかけた。

「あなたあ！ ちょっと出てくださらない？」

亭主は、佳境であった。

「ンッ……何だあ!!」

「勧誘がまた来たんですの。代わりに断っていただけな
いかしら！」

「ったく！ そんなことも一人でできんのか、アイツは
……」

トイレから勢いよく水の流れる音がする。

「どうせ新聞屋だろっ」

(澁谷)

お客さん、終点です。